

**Brussels, Paris, London,
New York, Seoul, New Delhi,
Berlin, Neuss, Gothenburg ...**

WORLD NEWS



2点とも「ジュリアン・メアート:新作」展より
左—展示風景。2作品とも《無題》(2016)
右—無題 2016
© Hugard & Vanoverschelde



「カト・シックス:バックグラウンド・ハミング」展示風景。2作品とも《無題》(2016)
© Kato Six,
Hugard & Vanoverschelde

「ジュリアン・メアート:新作」展
Julien Meert: NEW WORKS
3月10日~4月9日
クリアリング
CLEARING
* Avenue Louise / Louizalaan 292
1000, Brussels
Tel. +32-2644-4911
11:00~18:00 日月休

「カト・シックス:
バックグラウンド・ハミング」展
Kato Six: Background Hum
1月29日~3月26日
c-o-m-p-o-s-i-t-e
* Varkensmarkt 10 rue
du marché aux porcs 1000,
Brussels
14:00~18:00 日~水休

ブリュッセルは「新たなベルリン」か? 話題のアート・シーンをレポート

ベルギーの首都であるブリュッセルが、「新たな」または「次の」ベルリンと呼ばれるようになり、もう5年は経つだろうか。その言葉の裏には、ベルリンのシーンが停滞していると見られる向きもあるだろう。ベルリンに比べればコレクターが多く、制作とセールスが、結びつきやすいと言われるブリュッセル。他の都市と同様、家賃は値上がりしているものの、空きスペースもまだ多い。パリから「アルミン・レッシュ」、NYからは「バーバラ・グラッドストーン」などの大型ギャラリーが支店をオープンしている。2013年にはアントワープのギャラリー「オフィス・パロック」も移転してきた。3月には連続爆破テロ事件が発生し、不穏なニュースも絶えないブリュッセルだが、話題のアート・シーンを紹介したい。

11年にNYでギャラリーをオープンさせた翌年、ブリュッセルに支店を出したのが、「クリアリング」。ベルギーで今、もっとも注目されている若手ペインター、

ジュリアン・メアート(1983年ベルギー生まれ)による地元で初の個展では、5点の新作が階を分けて贅沢に展示された。鮮やかな色合いとはあべこべに、頭を抱え、肩を落とす人物像に、マティスやミンクの「キャラクター」が闊歩するといったコミカルな作品。これまでも、メアートの作風にはコミックスからの影響がうかがわれ、アクリルとエアブラシ、木炭でキャンバスに描かれるラインには、作家が意識を向ける「ドローイング」の要素が顕在化する。

カト・シックス(1986年ベルギー生まれ)もまた、ブリュッセルを拠点に活動する期待の若手だ。プロジェクト・スペース「c-o-m-p-o-s-i-t-e」での彼女の2度目の個展は、オブジェやウォール・ドローイングで構成された詩的なインスタレーション。作家は、空間を満たす実体と雲囲気、メタラルと記憶の関係について思考をめぐらす。インテリアとしての山の風景、「背景」である壁紙を立体化させる



上—「デボラ・ボウマン」のアマウリー・ドゥレル(左)とヴィクトー・ドレストレ(右)。いつも描いのスーツにネクタイでめいている
© Irwin Marchal & Deborah Bowmann
下—「タンゴ・チャレンジ」展の展示風景。写真では見えないが「香り」も展示の一部。「デボラ・ボウマン」とコラボレーションする作家たちとのグループ展で、パリのファッション・ブランド「アンドレア・クルース」との共同プロジェクト。中央の立体は、このブランドからのコミッションであり、期間中に作品が展示スペースから商業スペースへと移動する。作品の持つ文脈をリアルタイムで考えさせる
Copyright and courtesy of the artists and Deborah Bowmann, Brussels

ことで、空間のパワー・バランスが静かにかき乱される。「デボラ・ボウマン」は、昨秋、アムステルダムからブリュッセルにスペースを移転した、フランス出身の作家アマウリー・ドゥレル(1990年生まれ)とヴィクトー・ドレストレ(1989年生まれ)によるプロジェクトだ。開催中の展示は、筆者が見に行ったときにはコンセプトにより作品がすでに運び出されていた。ここでは継続中のプロジェクトとして、彼らの活動に言及したい。スペースが女性性を称しているのは、ファッション・ブランドのパロディーといったところか。彼らのウェブ・サイトには、家具/デザイン/アートとしてのオブジェが販売されており、「ブランド」と「展示スペース」の概念にアプローチしながら、スタジオ、そしてキュレーションの実践を体現する。また、アートフェアやデザインフェアにも出展。多様な作家たちとのコラボレーションも特徴的だ。芸術大学卒業後、コマース・

ギャラリーをサーチするのではなく、自らスペースを構え、マーケットに仕掛けて行く彼らのアクションに、新たな世代の台頭を感じた。そして彼らのような活動が、ブリュッセルで起こっていることにも留意したい。すでに海外から大勢の作家たちが移住してきているベルリンで、抜ん出た存在となるのは、そう簡単なことではない。だが、まだアート・コミュニティーの小さいブリュッセルでは、ネットワークの形成から、自身の展示への道も近いと聞いた。国が違えば言語も歴史的背景も、ベルリンとは全く異なるこの街が、メディアで「新たなベルリン」などと謳われるたびに、地元の関係者たちは苦笑しているという。テロの影響は懸念されるが、今春にはアメリカの新進アート・フェア「インディペンデント」が初めてブリュッセルで開催され、その参加ギャラリーや非営利組織のラインナップにも目を見張るものがある。



Brussels ブリュッセル

かないみき=文
Text by Miki Kanai
(Art journalist)

「タンゴ・チャレンジ」展
TANGO CHALLENGE
1月14日~3月10日
デボラ・ボウマン
Deborah Bowmann
* 24 avenue Jean Volders 1060,
Brussels
13:00~18:00 日~水休